



NEWS LETTER

International Institute for Advanced Studies

vol. **74**
November
2010

contents

報告  2010年度第2回企画委員会を開催
(10月8日～9日)

紹介  高等研研究プロジェクト紹介①

報告  RIMS 合宿型セミナー「ガロア理論の数論幾何」を開催
(10月20日～23日)

報告  高等研公開講演会②を開催(10月9日)
「生活習慣病の面白健康科学」

紹介  高等研招へい研究員の研究活動紹介
中国の遺跡を探る

報告  第5回合同見学会を開催(11月5日)
(木津川市「サイエンスフェスティバル」協賛)

お知らせ  高等研公開講演会③を予定(2月19日)
「ヒトの心と社会の由来を探る」

報告  普通救命講習会を実施
(10月16日)

お知らせ  秋の褒章関連

 事務局だより
「学術の芽を育てる」

お知らせ  川北稔副所長のご退任
(9月30日)

報告  研究活動実績・研究活動予定
(9月1日～10月31日)・(11月1日～2011年2月28日)



錦秋の高等研

報 告



2010 年度 第 2 回企画委員会を開催 (10 月 8 日 ~ 9 日)

2010 年度第 2 回企画委員会が、企画委員、研究代表者、フェロー等 19 名が出席して 10 月 8 日～9 日に開催されました。

委員会では尾池和夫所長から 2010 年度の研究事業の実施状況について概説がありました。

続いて各研究代表者から進捗状況について紹介があり、それを基に議論が交わされました。

また本年度開始の高等研学術道場プログラムに係る道場生の採択結果などについて紹介されました。

さらに高等研の研究事業のあり方と進め方について、所長及び各副所長の基本的な考え方が



第 2 回企画委員会

示され、その後、8 日は企画委員・研究代表者・フェロー全員で、また 9 日は企画委員により議論が交わされました。

以下高等研の研究事業のあり方と進め方について、所長及び副所長の基本的考え方に関しての発言要旨を転載します。

【基本的な考え方の発言要旨】

研究事業の目的を「新しい芽を探して育てる」というキーワードで明確に示すこととしました。すなわち、高等研は従来の学問分野を超えて、異分野の研究者たちの相互理解と緊密な接触を図る場を提供することを最大の特徴とし、この特徴を背景に自然科学、人文・社会科学等の分野を超えて次世代の学術研究の展開のために「学術の芽」を探索し、それを発掘し育成することを主たる研究の目的とします。

そのためにこれまでの企画委員会に代えて、来年度からは絞り込まれたメンバーによる「研究企画会議」を設置し、そのリーダーシップの下に高等研の中核研究事業の基本的考え方とその内容を明確にします。正副所長に加えて新規

に選考の学術参与で構成し 1)学術の動向や研究テーマの在り方と展望に関する調査と研究 2)研究テーマの立案及び研究プロジェクトの選考 3)「高等研カンファレンス」に関するテーマの設定とオーガナイザーの任命 4)フェロー等の選考 5)その他高等研における研究活動に関する諸課題への対応などを担います。

研究プロジェクトの推進については、現在 18 の研究プロジェクトが存在しますが、今後は研究テーマをあまり広げることなく、学術の動向と展望、高等研の存在意義も踏まえて、柱になるものに絞っていくことにします。

特に「高等研カンファレンス」は来年度から新たに開催するもので、この内容は研究所で実施される研究プロジェクトから選ばれる場合も、また研究企画会議で独自に立案されることもありますが、いずれも分野を越えた視野に立ち、広い領域から選ばれることを原則に、国際的にも一流の研究者に参加してもらうもので、当面毎年 1 回、1 テーマに関する国際シンポジウムを開催します。



(1) 言語と文学と芸術

(5) 物質と光

(2) 世界の構造変化と
世界観の転換新たな学術の
「芽」を見つける

(4) 宇宙・地球・人類

(3) 脳科学と心の科学

紹介



研究対象 (1) 言語と文学と芸術

「諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開」

(2009～2011年度・2年次)

来年 2011 年は「革命と数学に生きた」エヴァリスト・ガロアの生誕 200 年に当たり、各種の記念行事が企画され、また、関連する出版物も予想以上の売行きのようにです。理数離れが心配されていますが、数学への憧れは、少なくとも中高年層に關しては、いまだ健在です。代数方程式に対して根の公式の存在・非存在の意味を群論的に解明したガロア理論は「数学の美しさ」の象徴的な存在です。

ガロア生誕の頃には既に学界の重鎮であったジョゼフ・フーリエは、熱伝導

を研究して熱方程式を導出し、具体例を使える形で解いて見せました。

フーリエ級数は関数や極限の概念の形成を促す大問題でしたが、彼自身の目標は人類の幸福に役立つ研究でした。産業革命期のインフラは鉄道と電信であり、ケルヴィン卿は電信方程式の研究から大西洋海底電線の敷設まで手掛けます。数理物理学と数理工学は彼の本拠地グラスゴーで誕生したと英国人は言います。これらは「数学の豊かさ」の追究の典型例です。

さて、明治維新以後の日本の教育制度が画期的であったのは、初等中等教育の充実度と大学に工学部を設置したことだといわれています。



昭和の高度成長期までそれらは見事に機能しました。その制度設計の段階で、当時の政府はグラスゴー大学から二人の外国人顧問を招聘しています。工学部設置との関係は筆者には不明です。それゆえ本稿はお伽噺なのですが、当時の科学技術の最先端の動向を明治政府が取り込んだことだけは疑う余地がありません。

その後、我が

国の数学は世界のトップレベルに到達しました。しかし、「美しさ」と「豊かさ」という数学の 2 つの側面の連携は日本では未成熟です。本研究プロジェクトでは 21 世紀の人類が必要とする諸課題の数学的解明の糸口を探っていく場の構築を目指しています。例えば、「生命現象を記述し、解明するための数学」について...



高等研究プロジェクト紹介 1

研究代表者 高橋陽一郎
国際高等研究所企画委員／東京大学生産技術研究所特任教授／東京大学・京都大学名誉教授

出典：Mémoire de l'Académie des science de l'institut de France, vol.7, 1827, p.569-604

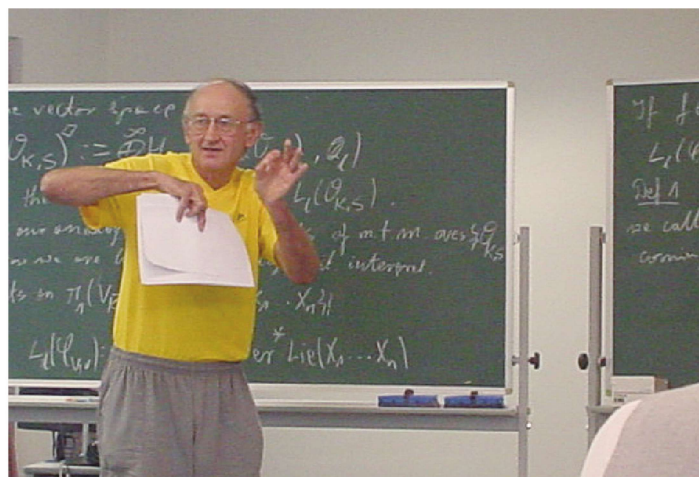
報 告



RIMS 合宿型セミナー「ガロア理論の数論幾何」を開催 (10月20日～23日)

本セミナーは、高等研と京都大学数理解析研究所（以下数理研（RIMS））の協定に基づき、数理研共同研究事業の一環として高等研で開催されました。

翌週に日本数学会と数理研の共同で開催された RIMS 研究集会「ガロア・タイヒミュラー理論と遠アーベル幾何学の展開」のサテライト集会と位置付けられる本セミナーは、組織委員長の中村博昭（岡山大）の下、Florian Pop（ペンシルベニア大）、Leila Schneps（パリ第六大）、玉川安騎男、星裕一郎（京大数理研）という分野を代表する研究者が組織委員を務め、海外から 25 名、国内から 24 名が参加する大変活気のあるセミナーとなりました。その中には、Pierre Cartier、伊原康隆ら内外の著名な研究者から多数のポスドク・大学院生まで、幅広い研究者たちが含まれました。



熱のこもった講演（Z. Wojtkowiak 氏）

当該分野は、整数論、代数幾何、トポロジーなどが交錯する、比較的新しい数論幾何の一分野ですが、本セミナーでは、最新の研究成果に関する 16 の講演と質疑応答に加え、期間中に即興で企画された 3 つの日替わり講演や、けいはんなプラザも利用した連日のナイトセッションなどを通じ、昼夜を分かたず最先端の研究者による熱のこもった研究討論が繰り広げられました。

RIMS 合宿型セミナーは「国内外から研究者が参集し、寝食を共にして討論を行う形式のワークショップ。当該研究分野の飛躍的な発展や次世代リーダーの育成に貢献することを目的とする」とうたわれていますが、高等研の滞在型研究所としての機能をフルに活用して、この理念にかなったセミナーとなりました。

本セミナーと翌週の研究集会の成果を基礎として、今後当該研究分野が飛躍的に発展することが大いに期待されます。その晩には、本セミナーに参加した若手研究者が次世代のリーダーとなっていることでしょう。



セミナー風景：真剣に聴き入る参加者たち

イベント報告



高等研公開講演会②

『生活習慣病の面白健康科学』

～元気に生きるための食事と運動～』を開催（10月9日）

今年度第2回目の「高等研公開講演会」（京都銀行協賛）を10月9日（土曜）に開きました。森谷敏夫・京都大学大学院人間・環境学研究科教授が『生活習慣病の面白健康科学～元気に生きるための食事と運動～』をテーマに、日常生活で注意すべき事柄を巧みな話術に乗せて分かりやすく説きました。また、国立国会図書館関西館は講演に関連する資料を展示しました。

終戦直後の約10年間、糖尿病の患者はほとんど見られず、その診断基準が定められたのは昭和30年のことで、当時は「成人病」という名称が使われていた。その後、若年層や子供にまで拡大し、病因が食事・運動・休養の生活習慣に根差すものであることがはっきりしたため「生活習慣病」に改められた。今や、糖尿病患者は890万人に達し、1300万人がその予備軍とされている。



生活習慣病として括られる肥満症、糖尿病、高脂血症、高血圧症は、いずれも自覚症状が少なく、知らぬ間に人の寿命を縮める。遺伝や過食を生活習慣病の原因とする俗説があるが、患者の急増ぶりを見ると遺伝だけでは説明できない。また、日本人の平均摂取カロリーは終戦直後も現在もほぼ1900キロカロリーで、現状は決して過食ではない。原因は運動不足にある。

近年、健康診断の項目として肥満度の指標BMI（体重kg÷身長m二乗）が加わった。肥満が生活習慣病の引き金となるため、22が標準で25超は肥満症と診断される。また、体脂肪の蓄積状態を判定するため腹囲の測定が行

われ、男性は85センチを限度とし、それを超えるとメタボと診断される。男性の半数がオーバーしている。地球規模で見ると、肥満は約12億人とされ、これは飢餓人口とほぼ同数でもある。体内とくに内臓に蓄積した脂肪に由来する生理活性物質は血栓などの原因にもなる。

食物の要素に、糖質、タンパク質、脂肪の3種がある。必要量以上の脂肪は体内に蓄積され、エネルギー源となる。タンパク質は筋肉などの体組織の再生に費やされ、体内には残らない。また、穀類や砂糖などの糖質はブドウ糖として、筋肉、臓器、脳が働くためのエネルギー源となる。ちなみに、脳だけで日に400キロカロリーを消費する。満腹感は糖質を食べることで血糖値が上がり、脳の中樞が働いて感じるができる。余剰の糖質はインスリンによって代謝されるのだが、過剰な状態が続くと膵臓そのものの機能が低下し、糖尿病を発症する。

持続的に運動することは、元気に生きていく上で大きな意味を持っている。体を動かすことによって、自律神経が活発化して体脂肪や体重をうまく調整でき、筋肉量が増えることで脂質代謝や糖代謝も良くなる。最近の研究では、軽い歩行程度であっても筋肉から免疫を強化する物質や生活習慣病を予防・改善するための遺伝子を活性化させる物質が放出されることが明らかになりつつある。健康を保つための優先順位は、まず運動。そして食事をしっかり摂る。禁煙できれば鬼に金棒。



森谷敏夫
京都大学大学院人間・環境学研究科教授

2010
年度第2回高等研公開講演会

紹介



高等研招へい研究員の研究活動紹介

中国の遺跡を探る

中国遺跡地点において学術調査が展開されている。(学術科研課題:「中国文化財保存調査研究」、研究代表:谷本親伯、平成22～24年度)今回は、「敦煌莫高窟」(甘粛省)および「龍游洞窟群」(浙江省)の調査状況についてお伝えしたい。

2010年8月および9月、敦煌および龍游の両地点に赴き調査活動を行った。担当者は、尾池和夫国際高等研究所所長他15名。期間はそれぞれ1週間。敦煌(写真1)での学術調査活動は、学術交流協定に基づき実施されている。今年度の調査期間は9月13日から20日。長期的連続環



写真2: 壁画の損傷を助長する塩害状況

境測定(洞窟内外)、壁画の塩害(写真2)、地下水移動、莫高窟の構造安定性などの研究課題と共に日中両国の文化財保存に携わる若手研究者・大学院生が1対1でチームを組み、等しく同じ課題に取り組む教育的効果も狙っている。さらに、当事者に加えて莫高窟保存に関係する国際組織、特に、米国ゲッティ財団研究所・英国コータード学院(壁画修復)などと適宜、情報交換会を開催し、得られた知見を共有している。10年以上に亘る15分毎の連続環境測定結果は貴重な基礎情報となっている。

次に、8月8日より14日まで行った龍游洞窟調査に触れる。龍游県は、上海国際空港から車で約5時間を要する。洞窟群は、1992年6月、偶然に発見された。発見以来6～7年間、何の進展もなく、2001年に中国科学院を通じて、谷本に調査依頼がなされた。

洞窟の面積は1000～3000㎡で、狭い入口から下方に掘削され、高さは約30mである。天井は、地層の傾斜に沿って仕上げられ、これを支える数本の柱(残柱)がある。発見された24の洞窟



写真1: 敦煌莫高窟を象徴する九層楼

の内、6つまでは排水され、中に入ることができる。(写真3,4) これらの洞窟群の建造年代、建造者、目的等はすべて不明である。現時点では、約2500年前、春秋戦国時代に姑蔑民族により建造されたのではないかとわれている。また、「史記」にもある「臥薪嘗胆」なる言葉はここから始まったとの説も聞く。これも単なる推定の域を出ないが、「穀物倉庫」あるいは「地下採石場」の可能性が高いとみる。今年度は、長期環境測定と構造安定性の評価に着手した。

さらに、2010年8月13日、龍游県主催の国際研究拠点開所式が開かれた。国際高等研究所の名称を真中にした立派な金属製のプレート(写真5)の除幕式、関係者の表彰、地元テレビ局のインタビューなどがあり、湿度100%の洞窟内の厳しい環境での連日の調査の中、晴れやかなひと時であった。



写真3：2号窟の状況



写真4：水没中の洞窟

【寄稿】

谷本 親伯（たにもと ちかおさ）国際高等研究所招へい研究員
工学博士・大阪大学名誉教授・アライアンスフォーラム財団シニアフェロー

小泉 圭吾（こいずみ けいご）
工学博士・大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻助教



写真5：国際研究拠点プレート（除幕式）

イベント報告



第5回合同見学会を開催(11月5日) (木津川市「サイエンスフェスティバル」協賛)

第5回目を迎える合同施設見学会は、地域の方々のご協力をいただき11月5日に無事終了しました。

従来は、5月に隣接する3機関(IAS・OMRON・RITE)の合同施設見学会を開催していましたが、今年は木津川市が主催する平城遷都1300年祭等のイベント「サイエンスフェスティバル」への協賛事業と位置づけ、高等研とオムロンとの2機関合同で開催しました。

秋晴れに恵まれましたが、参加者は近隣の方を中心に65名と今までよりも出足が悪かったようです。

当日は昨年に続き、木津川在住のコーラスグループによるコーラス(指揮・内藤氏、ピアノ伴奏・藤本氏、ゆーゆー男声合唱団、ゆりの木コーラス・女声合唱団)の皆様によるプチコンサートを実施。男声・女声そして混声による合唱をご披露いただきました。

茶室「雅松庵」でのミニ茶会では、岸大路氏及び近隣ボランティアの伊藤氏、岡田氏によるお抹茶の点てだしを行い、参加の皆様や高等研研究プロジェクト参加の外国人研究者の方々に伝統文化をご堪能いただきました。

今回の新しい試みの一端を紹介します。一つ目は、高等研の研究成果をまとめた報告書や選書の書籍展示を行いました。見学者の皆様は興味深く手に取って眺めていらっしゃいました。(ご要望の方は高等研WEB <http://www.iias.or.jp/academic/index.html> 参照)

二つ目は、来場者へのノベルティとして「学術の芽」・「お豆メッセージ」を高等研オリジナルとして差し上げました。(11ページ参照)

当日、ご参加の皆様からの貴重なご意見をいただいています。その内容をご紹介します。

今後の改善に参考にさせていただきます。

高等研へのご意見・ご感想 (アンケートの紹介)



色づく庭園で憩う参加者

- ・雅松庵にてお茶のおもてなしに、気持ちの上からも大変良かった。日頃から多くの関係者にいかされたら・・・。
- ・できたら土日も開催してほしい。
- ・物事を研究するには、環境が整っているように思えました。

研究プロジェクトメンバー：
「雅松庵」小間席にて



- ・前からこの建物は何かなと思っていたので、今回見学できてよかったです。
- ・こんなに立派な茶室があるのを初めて知りました。おいしいお茶ときれいな風景・・・本当にありがとうございました。
- ・広い施設内の掃除、管理が行き届いている様に感じられ感心しました。

ゆーゆー・
ゆりの木混声合唱風景：
コミュニティーホールにて



- ・実際の活動がわかりにくい。開催内容が変わるのなら次回も参加したい。
- ・ビデオの上映があってもいい。
- ・参加者が去年よりも少ないのでは？もっとPRされたい。
- ・説明情報が目立たないので、よくわからなかった。



ミニ茶会：
高等研茶室「雅松庵」

お知らせ



高等研公開講演会③

「ヒトの心と社会の由来を探る

～霊長類学から見る共感と道德の進化～」を開催予定（2月19日）

2011年2月19日（土）京都銀行協賛による2010年度第3回目の公開講演会を開催致します。

講師には、京都大学大学院理学研究科 山極寿一教授をお迎えし、ヒトの心と社会の由来を探る～霊長類学から見る共感と道德の進化～というテーマでご講演いただきます。

山極教授は、アフリカ各地でゴリラの野外研究に従事され、現在はゴリラとチンパンジーが熱帯林の同じ場所でどのように共存しているかを研究され、また、類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っていらっしゃいます。

『ゴリラとヒトの間』（講談社現代新書）、『家族の起源』（東京大学出版会）など、他多数を出版されている霊長類研究の第一人者の先生です。

ぜひ多くの皆様のご参加をお待ちしています。詳しくは講演会案内のチラシ高等研 WEB サイトをご覧ください（<http://www.iias.or.jp>）

■ 開催概要

演 題：「ヒトの心と社会の由来を探る
～霊長類学から見る共感と道德の進化～」
講 師：山極寿一氏
京都大学大学院理学研究科 教授
開催日時：2011年2月19日（土）14：00～16：00
場 所：高等研レクチャーホール

【講演要旨】

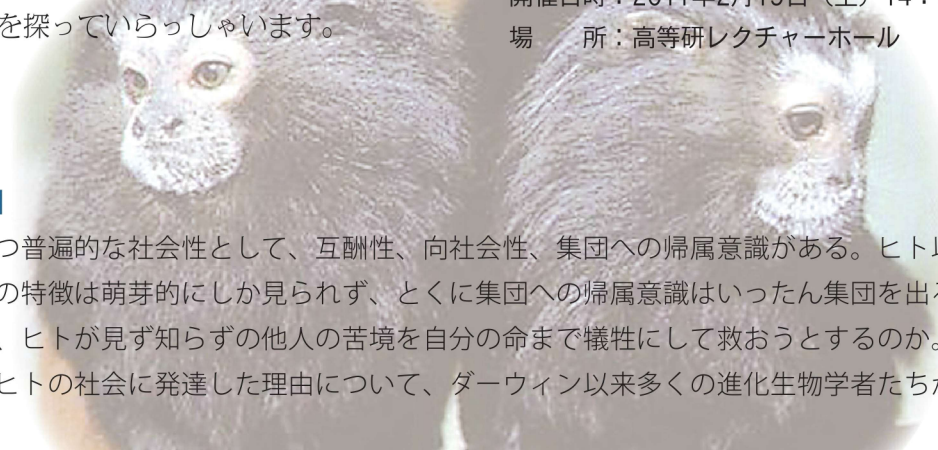
ヒトのもつ普遍的な社会性として、互酬性、向社会性、集団への帰属意識がある。ヒト以外の霊長類ではこれらの特徴は萌芽的にしか見られず、とくに集団への帰属意識はいったん集団を出ると消えてしまう。なぜ、ヒトが見ず知らずの他人の苦境を自分の命まで犠牲にして救おうとするのか。この道德という規範がヒトの社会に発達した理由について、ダーウィン以来多くの進化生物学者たちが頭を悩ませてきた。

私はそれが、霊長類の能力を用いながらヒトの祖先が捕食者の多い環境で脳の大きな子供を育てるために採用した、生活史戦略と共同保育にあると考えている。ヒトの生活史上の特徴を近縁な類人猿と比較してみると、乳児期、少年期、成年期、老年期という共通性の上に、子ども期と青年期をもつことと、老年期が長いという違いがあることがわかる。なぜ、このような不思議な生活史の特徴が進化したのか。

そこには、安全な熱帯林から出て肉食獣の多い草原へと進出した時代にヒトの祖先が直面した課題と、直立二足歩行を完成させた後に脳を大きくした人類進化の歴史的制限要因が隠されている。老年期の延長は類人猿にはない子ども期と青年期を支えるために現れた特徴だと私は考えている。それには共同の子育てをする家族という社会単位の創造が不可欠だった。

家族はヒト以外の霊長類にはない共感を育て、その能力をもとに多様な協力関係を可能にした。それは強い帰属意識を育て、個人の集団遍歴を可能にし、重層構造を持つ共同体の存立基盤となった。ヒトの赤ちゃんの身体的特徴には共同保育の歴史が刻印されており、ヒトの食と性の特徴には家族を超えて共同体を発達させてきた歴史が隠されている。

一般の霊長類とは違って、食を公に広げ、性をプライベートな世界に封じ込めたからこそ、それが可能になったのである。それをヒトのユニークなコミュニケーションの方法から解き明かしてみたい。



2010
年度
第3
回
高
等
研
公
開
講
演
会

山極寿一
京都大学大学院理学研究科教授

報 告



普通救命講習会を実施（10月16日）

普段は健康に見えても、急激な体の変調はあり得るものです。体調を急に崩して生死に関わるような容態に陥った場合でも、救急車の到着（平均7～8分）までに心肺蘇生法やAED（自動体外式除細動器）による救命措置を行うことで、一命を取り留める可能性が格段に高くなると言われています。

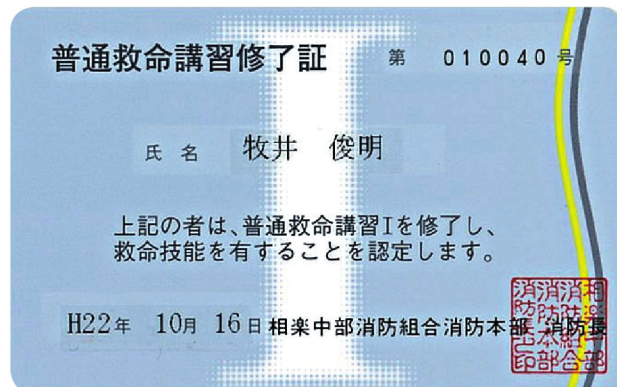
高等研では、毎年研究会や公開講演会等に年間で延べ2000人程度の来訪者を迎えます。若手の研究者から高齢の碩学まで年齢層も多様です。そこで、年間を通じて多くの方々を迎える高等研で、



人体模型を使ったAED操作の講習

体調の急変を訴える方が発生した場合でも的確な対応が取れるようにすることが肝要と考え、事務局の職員を対象に、普通救命講習会を10月16日に実施しました。

講習会では、相楽中部消防組合消



防本部警防課から救急救命士と救急隊員2名を講師及び実技指導者として招き、応急手当の基礎知識とその重要性、心肺蘇生法、AEDの使用法、異物除去法などの救命に必要な応急措置についての講義、人形を使用しての実演及び職員全員による実技など、約3時間に亘る講習指導を受けました。

知識として受け入れるだけではなく、実際に体験することの重要性を改めて実感した講習会でしたが、今回の講習会での体験が活かせるよう、日頃から救命救急に係る意識を高めるとともに、万一の場合を想定して、的確な応急措置が行えるよう心がけたいと考えています。

お知らせ



褒章関連 国際高等研究所の文化勲章・叙勲受章

高等研関係者の2010年度文化功労者(10月26日発表)及び秋の叙勲受章者(11月3日発表)をお知らせします。

■ 文化功労者

中野 三敏 九州大学名誉教授（2005年度高等研フェロー）

■ 叙勲受賞者

瑞宝重光章 山崎 敏光 東京大学名誉教授（2000年度高等研フェロー）

瑞宝中綬章 岩田 一明 大阪大学・神戸大学名誉教授（2001年度高等研フェロー）



事務局だより「学術の芽を育てる」

いつも高等研ニュースレター（NL）をお読みいただき有難うございます。このNL74号が皆様のお手元に届く頃は師走を迎えて何かとお忙しい頃と拝察いたします。

NLは、今年1月の69号から内容と装いを一新し、高等研の財団活動や研究活動の様子を2ヶ月毎にお届けしています。

お蔭さまで皆様からのご要望や暖かいご声援に支えられ、この1年間、途切れることなく発行することができました。事務局一同感謝申し上げます。

振り返ってみますと、NL69号（2010年1月号）の尾池和夫所長の「新しい年（2010年）を迎えて」のご挨拶の中にありますように国際高等研究所の果たすべき使命を「学術の芽を見つけ、それを育てる」と述べておられます。またNL73号（2010年9月号）の特集記事・正副所長座談会——「高等研のあり方を考える」では、「新しい学術の芽を見つけ、それを育てるにはどうすればいいのか」を真摯に論じておられます。

先ごろ高等研の向かいのオムロンと連携して合同施設見学会（本文8ページ紹介）を実施しました。来場者へのノベルティとして「学術の芽」「お豆メッセージ」を高等研オリジナルとして差し上げました。高等研事務局員のNさんたち女性陣のアイデアから生まれました。

この「学術の芽」「お豆メッセージ」には若干の仕掛けがあります。パッケージを開け水を差し、温度管理を上手に行うなど愛情をもって育てると、不思議なことに10日前後でご覧のように発芽したお豆の片面に「学術の芽」、もう片面に「IIAS」のメッセージが浮かび上がります。

お知らせ



川北稔副所長のご退任（9月30日）

川北稔副所長（イギリス近世史・世界システム論）は、2009年4月にご就任以来、人文科学分野のお立場から研究所運営に携わっていただきましたが、健康上の理由により2010年9月30日付けにて退任されました。

やがて葉が出てツルが伸び1mほどに育つとのこと。植え替えれば更に大きく育つようです。

この豆は「白なた豆」といい、原産は熱帯地方で日本には江戸時代初期に中国を経て伝来したとのこと。イングランド地方の代表的な民話の「ジャックと豆の木」に出てくるあの豆です。ご存知の方も多いと思います。

高等研事務局では試験的に三鉢を発芽前から成長状況を記録しています。発芽しにくい豆もあるようですが、気長に大事に手入れをしています。やがて見事にツルが伸び、真っ白い花が咲き、実をつけるように見守っていきます。

成長の様子は高等研WEBに掲示する予定ですので、一緒に「学術の芽」を育てましょう。

来る年も皆様方にとって実りの多い年になりますようお願いしています。

私たち事務局一同、皆様方にお役に立てるようがんばっていきますので、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

（事務局・す）



報 告



研究活動実績（9月1日～10月31日）

研究プロジェクト	開催日	研究代表者	参加者数
ナノスケールの原子構造および電子状態とその変化の理論的設計 (山田科学振興財団との覚書に基づく研究協力)	8月31日(火)～9月1日(水)	白井正文	17
宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－	9月3日(金)～4日(土)	天野文雄	15
21世紀における文化としての設計科学と生産科学	9月4日(土)	岩田一明	10
第17回コンピューショナル・マテリアルズ・デザイン (CMD) ワークショップ (於：大阪大学)	9月6日(月)～10日(金)	赤井久純	84
天地人-三才の世界：宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造 (サマースクール・日本測地学会共催)	9月8日(水)～11日(土)	尾池和夫	27
研究成果の取りまとめ会合「生物進化の持続性と転移」	9月8日(水)～9日(木)	津田一郎	12
ナノ物質量子相の科学	9月10日(金)～11日(土)	金森順次郎	42
絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識	9月18日(土)	近藤寿人	19
フェロー研究会「森里海連環と地球的課題」	9月24日(金)～26日(日)	田中克	134
近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造	10月1日(金)～2日(土)	手島勲矢	18
2010年度第2回企画委員会	10月8日(金)～9日(土)	尾池和夫	19
意識は分子生物学でどこまで解明できるか？	10月9日(土)	山森哲雄	4
高等研公開講演会「生活習慣病の面白健康科学」～元気に生きるための食事と運動～	10月9日(土)	森谷敏夫	78
21世紀における文化としての設計科学と生産科学	10月15日(金)～16日(土)	岩田一明	9
文化財保全技術	10月15日(金)	志水隆一	7
諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開	10月20日(水)～21日(木)	高橋陽一郎	5
数理解析研究所RIMS合宿型セミナー「ガロア理論の数論幾何」 (京都大学数理解析研究所との協定に基づく共同研究)	10月20日(水)～23日(土)	中村博昭	49
単分子エレクトロニクス of 現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築	10月22日(金)～23日(土)	夢田博一	25
フォーラム「複雑系情報の社会への発信システム」 (ワークショップ・海洋研究開発機構共催)	10月30日(土)～31日(日)	尾池和夫	12
地域連携イベント 木津川市「サイエンスフェスティバル」協賛 ～第5回合同施設見学会～「高等研・オムロン」	11月5日(金)	――	65

カレンダー



研究活動予定（11月1日～2011年2月28日）

開催予定日	研究プロジェクト	研究代表者
11月4日(木)～6日(土)	アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築	藤田治彦
11月5日(金)～6日(土)	メタマテリアルの開発と応用	石原照也
11月12日(金)～13日(土)	受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合	ジュリーブロック
11月26日(金)～27日(土)	近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造	手島勲矢
11月26日(金)～27日(土)	交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	松岡博
11月27日(土)	ナノ物質量子相の科学（幹事会）	金森順次郎
11月27日(土)	研究成果の取りまとめ会合「エネルギー科学における多階層連結コンピューティング」	三間 園 興
12月4日(土)	製造業における知的資産経営の評価と開示方法に関する調査研究	岩田一明
12月10日(金)～11日(土)	フェロー研究会「十八世紀における世界観の多元的交錯」	石川文康
12月13日(月)～14日(火)	天地人-三才の世界：宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造（於：京都市内）	尾池和夫
12月17日(金)～18日(土)	宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－	天野文雄
12月17日(金)～18日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩田一明
12月22日(水)～24日(金)	宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	海部宣男
1月5日(水)～8日(土)	諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開	高橋陽一郎
1月14日(金)～15日(土)	ジオ多様性研究会	尾池和夫
1月20日(木)～22日(土)	アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築	藤田治彦
2月18日(金)～19日(土)	2010年度第3回企画委員会	尾池和夫
2月25日(金)～26日(土)	交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	松岡博
開催予定日	公開イベント	講師
2月19日(土)	公開講演会「ヒトの心と社会の由来を探る～霊長類学から見る共感と道徳の進化～」	山極寿一

カレンダー



高等研就業カレンダー（12月～2月）

■ 休業日（祝祭日を含む）

12	1	2011	2
日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	19日：公開講演会	日 月 火 水 木 金 土
5 6 7 8 9 10 11	2 3 4 5 6 7 8	6 7 8 9 10 11 12	
12 13 14 15 16 17 18	9 10 11 12 13 14 15	13 14 15 16 17 18 19	
19 20 21 22 23 24 25	16 17 18 19 20 21 22	20 21 22 23 24 25 26	
26 27 28 29 30 31	23 24 25 26 27 28 29	27 28	
	30 31		